

## 小児の成長の地域差に関する研究

(研究協力者)

東郷正美 (東京大学教育学部健康教育学研究室)

(研究協力補助者)

渡辺チイ (東京女子医科大学第一衛生学教室)

鈴木路子 (東京学芸大学保健学教室)

中村 泉 (帝京大学医学部衛生学教室)

岡島佳樹・西岡伸紀・菊田文夫・中藺伸二・瀧澤利行・及川 研

田中茂穂 (東京大学教育学部健康教育学研究室)

心身の成長・発育は、ありふれた、しかし容易には正しく理解する事の困難な現象である。

わが国は、面積は狭いながらも、東経 125 - 145 度、北緯 25 - 45 度の範囲から南西及び北東部がはみ出る程広く分布している。即ち亜熱帯から、冬期オリンピックが開ける地域までが含まれている。地域によって異なる気候・風土や、都市と農村のような差も成長・発育に大きな影響を与えている。さらに、最近の人類学や考古学の研究では日本人は単一民族ではなく、少くとも二種類の人種から成り立っているとされている。

成長・発育に影響を与える因子は遺伝と環境であるが、地域差には、この両者とも深いかわりが存在する筈である。我々はこの両者の影響を受けた結果としての成長を、たとえば身長とか体重などの測定値を通して見ているのである。従って、地域差はあるのが当然であるという事が本研究の前提条件である。

日本人は地域差に価値判断を下したがるように、これらの差を優劣の差として読み替えて、一喜一憂する傾向が強い。そして次には、この差を解消すべきであると考ええる。

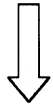
この考えのある部分は正しいであろう。たとえば、十分な食物が与えられない為に成長が十分に遂げられなかったり、感染症や寄生虫病などの為に発育の遅滞が生じたりする事があれば、これらの原因を取り除く努力が払われるべきである。発育期の者でも、生存の為に激しい労働に従事しなければならぬとすると、これも

発育を阻害する。

世界中のどの民族も、厳しい条件下で生存して来ており、日本人も例外ではない。しかし敗戦後の劣悪な環境から短時間で経済的な繁栄を達成し、少くとも身体的な発育を妨げていたと思われる多くの因子の除去に成功した。それでも尚地域差が存在するし、個人差も当然存在する。地域差を解消する事が焦眉の急でなくなった現在、成長の地域差を研究する事は、地域差を通して、成長の本質に一步でも近づく事であろう。

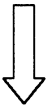
この目的の為に、どのような方法があるだろうか。身体計測値を処理する事も一法であるくり返し身体計測が行なわれているので、発育はすでに十分に理解されているようでいて、実は我々は発育のほんのわずかを知っているに過ぎない。出生時から乳児期を過ぎると、就学までの間のデータは極めて少ない。この期間の成長をまずは測定し、学校保健統計につなぐ事ができれば、生下時から義務教育終了の満 15 才、あるいは高校進学率が高いので、18 才までの発育のほぼ全期間に亘るデータを評価し、活用する事が可能となる。

本年度の我々の研究は、乳児期と就学時の大きなギャップを埋めるのに、どのようなデータが存在し、入手可能なのか、どこまでギャップが埋められるのかを探る事である。それと同時に、既存の学校保健統計や、各学校にある生データから、地域差を評価するのに最適な変数は何であるかを探る事である。本報告は、このような方針で行なわれた研究の結果である。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



心身の成長・発育は、ありふれた、しかし容易には正しく理解する事の困難な現象である。

わが国は、面積は狭いながらも、東経125-145度、北緯25-45度の範囲から南西及び北東部がはみ出る程広く分布している。即ち亜熱帯から、冬期オリンピックが開ける地域までが含まれている。地域によって異なる気候・風土や、都市と農村のような差も成長・発育に大きな影響を与えている。さらに、最近の人類学や考古学の研究では日本人は単一民族ではなく、少くとも二種類の人種から成り立っているとされている。

成長・発育に影響を与える因子は遺伝と環境であるが、地域差には、この両者とも深いかわりが存在する筈である。我々はこの両者の影響を受けた結果としての成長を、たとえば身長とか体重などの測定値を通して見ているのである。従って、地域差はあるのが当然であるという事が本研究の前提条件である。